

人物像の再構築 — マリリン・ロビンソンの試み

森本信子*

はじめに

マリリン・ロビンソンというアメリカの女性作家を知る人は日本では多くはないかもしれない。2004年のピューリッツァー賞受賞作 *Gilead* も 2009年のオレンジ賞受賞作 *Home* も翻訳されていない。1981年の処女作 *Housekeeping* はピューリッツァー賞の候補に挙がり、ペン/ヘミングウェイ新人賞を受賞し、映画化もされた。この作品から *Gilead* まで約20年の間には2冊のノンフィクション作品が出版され（そのうちの1冊は『ピーターラビットの自然』という題名で邦訳がある）、いくつかの書評が文芸誌に掲載された。最新作は2010年の *Absence of Mind* で、科学と宗教の対立について論じた評論である。本論考で扱う *Gilead* と *Home* は、どこにでもある日常的な世界の中で、それぞれに問題を抱えながら生きる人物たちの細部にわたる描写を中心として、キリスト教、黒人解放の歴史、公民権運動などのテーマが絡み合うものだ。人物関係、比喩的文体、複数のテーマが織りなす重層構造が、「世界で最も優れた散文作家」(Appleyard) とも評されるゆえんであろう。

Gilead の語り手は「会衆派（コングリーゲーションリスト）」の牧師であり、*Home* の主人公たちは「長老派（プレスビテリアン）」の牧師一家である。これらの宗派はヨーロッパを離れアメリカを築いたピューリタンから派生した最も伝統あるプロテスタントである。登場人物たちは、食事前の感謝の祈りを欠かさず、会話には聖書の引用が頻繁に登場する。「罪深い人間は救われるのか」「放蕩息子を許すことができるのか」といった宗教的な問いかけが、人種問題や地域性を絡め聖書の引用を交えて繰り返しなされる。しかし、マリリン・ロビンソンが提起する問題は、犯罪と裁き、許し、父と息子の葛藤など、人間の本質にかかわる普遍的な問題でもある。彼女の小説が「二重性と逆説に満ちた」(Scott) ものであるのは、「目の前にあるものを、ただしっかり見ようとしてきた」(*The Death of Adam* 243) マリリン・ロビンソンが「人間の心の奇妙さ」(*Absence of mind* 35) を描こうとする姿勢の当然の帰結である。

Gilead と *Home* は、ギリアドという架空の町で同時期の出来事を別の視点から描いた姉妹小説である。マリリン・ロビンソンは *Gilead* を書き終えた後「十分に描かれていない人物たちがいるような気がした」(*The Paris Review*) と語っているが、物語の続きではなく、同じ物語を別の視点から書くことで、どんな風に「十分に」描こうとしたのだろうか。本論考では、*Gilead* で語り手エイムズが記述したのと同じ場面が *Home* でどのように語られているかを検討することで、エイムズの報告の特徴を探り、エイムズという人物がどう再構築されることになるかを明らかにする。

1 *Gilead* と *Home* を構成する人物たち

Gilead と *Home* の主な登場人物は、76歳の牧師ジョン・エイムズ、まだ幼い息子ロビーと妻ライラ、エイムズの幼馴染で牧師を引退したポートン、その息子ジャックと、娘グローリーである。*Gilead* は、心臓を悪くして死を覚悟したエイムズが、成長した息子に伝えたいことを日々綴っていく手紙である。*Home* は、婚約者と別れてポートンのもとへ帰ってきたグローリーと周囲の出来事を描く三人称の物語である。

Gilead では、語り手エイムズはジャック帰郷のニュースに不安を覚え、息子と妻をジャックに会わせたくないと感じている。なぜジャックをそれほど恐れるのかなか明かされない。その理由が幼いころからのジャックの窃盗

* 薬学部 第4英語研究室

や放火といった非行であること、エイムズもその被害をこうむってきたことが、次第に明らかにされる。エイムズはジャックの悪の側面に焦点を当てていると言えるだろう。一方の *Home* では、ジャックは妹グローリーの視点から観察され、頭がよく、礼儀正しく、いつもひっそりとして、しかしなにより家にいながら異邦人と感じているかのような孤独な人物として描かれる。ジャックは、町の人々の敬意の対象である長老派牧師一家のみ出し者だが、家族はみなジャックを大切にしてきた。グローリーが語るジャックは、決して悪人ではない。エイムズの妻ライラは *Gilead* と *Home* を比較する本論考で、最も重要な人物である。ある日突然エイムズの教会に現れ、30歳ほどの年齢差がありながら結婚に至った。彼女の過去は全く未知であり、エイムズはそれを問い詰めることはしない。きちんとした英語を話せないライラは、牧師の妻として十分な教養の持ち主とは言い難く、物語の中で異質な存在である。ライラはその異質性において、疎外された存在としてのジャックと無縁ではないのである。

ジャックがある日曜日エイムズの教会に行くと、エイムズは父親の犠牲になる子供について説教をしていた。ジャックには学生時代に貧しい少女に子供を産ませ二人を捨てた過去があった。ジャックはこの説教で自分が非難されたと思ひ逃げようとして去ってしまう。エイムズもまたジャックがこの説教に居合わせた偶然を不運だと思っていた。翌日、ジャックの妹グローリーが訪ねてきて、父親から渡すように頼まれた雑誌を置いていく。*Home* によれば、エイムズの説教に衝撃を受けたジャックを見て、エイムズに腹を立てたポートンたちだったが、やはりエイムズとの関係を回復したいと考えて仕組んだ出来事だった。エイムズもポートンたちが自分の説教で気分を損ねていないか確かめたいと考え、息子を連れてポートンの家に雑誌を返しに行く。グローリーとジャックも父親たちの会話に加わり、夕食の時間にエイムズと息子と呼びに来たライラも参加する。ここは、*Gilead* と *Home* の主要な登場人物たちが一堂に会する2つの場面のうち、双方の小説で報告される唯一の場面である。ジャックを不安の対象でしかとらえていないエイムズと、家族としてジャックの孤独に共感し続けてきたグローリーでは、この会話のとらえ方にどのような違いがあるのか細かく見ていくことにする。

2 予定説の会話が始まる

するとジャックが割り込んできて、私に言った。「では、牧師、予定説に関するあなたのお考えをお聞きしたいのですが。」

さて、これは、おそらくこの世で僕が一番好まない話題だ。これまで幾度となく、予定説について語られるのを聞いてきたが、誰の考えもそのほんの一部についてだけだった。いい大人たちが、神を恐れる人たちが、予定説をめぐって殴り合いになったのを見たことがある。まず僕の頭に、君が予定説のことを言うのはアタリマエのことだがね! という考えが浮かんだ。

そこで僕は言った。「それは複雑な問題だね。」 (*Gilead* 170. 邦訳と下線はすべて著者による。)

ジャックは、かなり唐突に言った。「エイムズ牧師、予定説に関するあなたのお考えを知りたいのですが。だって、今あなたは、生まれの偶然について話されていたでしょう。」

エイムズは言った。「それは難しい問題だね。複雑な問題だよ。僕自身この問題をずっと考え続けてきたがね。」 (*Home* 219)

Home においても、ジャックの会話への参加は「かなり唐突に」と表現されているが、「割り込んできて」というエイムズのことばには、ジャックの参入を歓迎していない気持ちが表れている。さらに、*Home* の語り手によれば、ジャックが予定説を持ち出したのは、その前にエイムズが「生まれの偶然」について話していたことがきっかけであり、会話の流れの延長上にあることになっている。ところが、*Gilead* では、自分が「生まれの偶然」について話して

いたことは書かれておらず、予定説を気にするジャックがいきなり持ち出したかのように書かれている。「アタリマエのことだがね！」の部分には、ジャックの悪行と予定説を結びつけ批判するエイムズの内面の声が再現されている。この皮肉な調子を「そこで」という接続詞が受けており、「複雑な問題」がとりわけジャックが抱える問題を指したことばのように受け取れる。一方、*Home* でのエイムズは、ただ会話の流れのままに、一般的な「生まれの偶然」について「難しい」「複雑な」という感想を述べているだけで、ジャックを念頭に置いているわけではない。エイムズの報告によるせりふのほうが、ジャックの悪の側面に焦点を当てようとしていると言えよう。

「単純化してみましよう」と彼は言った。「神の意図で、人間にはどうにもできないものとして、地獄に行くことが定められている人間もいるとお考えですか。」

「そうだな」と僕は答えた。「単純化してしまうと、問題を避けるどころか大きくすることになることもあるが、これはそういった類のものだね。」 (*Gilead* 170)

「こんな風に言い直してみましよう。神の意図で、人間にはどうにもできないものとして、地獄に行くことが定められている人間もいるとお考えですか。」

「その点はこの問題の一番難しいところだと思うよ。」 (*Home* 219)

地獄へ墮ちる定めについての質問にも即答を避けるエイムズだが、*Gilead* の報告で2度繰り返される「単純化」という言葉は、*Home* の語り手は全く使わず、「言い直す」と書いている。また、エイムズのせりふは、*Home* では「難しい」という直前に述べた感想を繰り返すだけなのに対し、*Gilead* でははるかに複雑で論理的な文章を言ったことになっている。少し先のエイムズのせりふが、数行にわたる長さなのに、*Gilead* と *Home* で一字一句同じであることも、この部分での相違を際立たせる。エイムズは「単純化」の欠点を論理的に説きながら、そんな言葉を使ったジャックを間接的に批判し、ジャックの質問に答えることを巧妙に避けている。一見理論的な議論をしているように見せかけて、ジャックを拒否する気持ちを潜ませている。エイムズはいずれ息子に読まれることを意識して、正論を述べる父親像を演出しようとしたのかもしれない。

ジャックとエイムズのやり取りを聞いているグローリーが「こういう言い争いは何千回と聞いてきたけど、大嫌い」(*Gilead* 171, *Home* 221) と会話を中断させ席をはずそうとするが、他の誰も彼女について行こうとはしない。*Gilead* では「しかし、君の母親はじっと座って、聞いていた」(*Gilead* 172) と、ライラに席をはずすそぶりが全くないことが報告される。グローリーとの対比を示す「しかし」と言う接続詞は、エイムズがライラを注視していることを示す。*Home* の語り手は、グローリーが「視線をしっかりと兄に向けた。彼はほほ笑んだ。彼女は家に入った。すると彼女には彼が話す声が聞こえた」(*Home* 221) と伝えており、ライラに関する記述が全くないのと対照的である。エイムズにとっては、グローリーをうんざりさせるような議論をライラが「聞いている」ことが、よほど驚きだったのだろう。日頃議論に加わることに消極的なライラの意外な姿にエイムズの意識は集中していく。

3 エイムズが不機嫌になる

この後、*Home* では、*Gilead* になかったエイムズとジャックの会話が報告されている。ジャックが執拗に、父親の罪のために子が苦しむことはあるのか、と問い続ける。会話を聞いているグローリーの「エイムズも何年も前に子供を亡くしているのをジャックは忘れたのかしら、それとも、エイムズも子供の死によって罰せられている、エイムズも罪人だ、と暗に言いたいのかしら」(222) という考えは、エイムズ自身にもはっきりと浮かんだはずだ。というのもジャックに対するエイムズの反応について「彼のことはとげがあった。沈黙が続いた」(222) と報告されているからで

ある。ジャックとエイムズの緊張した言葉の応酬は続き、エイムズは「はっきりと腹を立てて」(224)、ジャックの過去を想起させる当てつけのことばが出てしまう。「父親が善人ではないから子供が苦しむことは実際にある。誰にでもわかることだ。常識だろう」(224)と言われたジャックは「僕は本当に罪深い人間だ」(224)と言う。「罪深い人間」という言葉はジャックの父親もこの一連の会話の中で使っているが、エイムズの口からは決して出てこない。エイムズだけが罪の自覚から遠いところにおり、ジャックに対する不寛容がしだいに露呈されていく。

続くジャックの「生まれつきの悪人で、悪人としての人生を生き、ついに地獄に墮ちるしかない人間はいるものですか」(Gilead 172, Home 225)という問いかけは、自分の存在価値を問う根源的なものだ。こう聞かれたエイムズが「一般に、人の行為は本質と一貫しているものだよ。人の行為には一貫性があるということだ。一貫性とは本質という言葉で言い換えられる」(Gilead 172, Home 225)と答え、それに対してジャックが「じゃあ、人は変わらないのですね」(Gilead 172, Home 226)と答えるやり取りは、GileadとHomeでほぼ同じである。これに対するエイムズの答えから相違が大きくなる。

「変わるとも、何か他の要因が関わればね。酒とか、個人的に影響するようなことだ。つまり、行為は変わる。だからと言って、それが本質が変わることなのか、本質の別の面が現れるということなのかは、判断しにくいがね。」

彼は言った。「聖職者にしては、あなたはかなり慎重な方ですね。」

これを聞いた老ポートンは笑った。「君は30年前に会うべきだったな。」

「会いましたよ。」

「じゃあ」と彼の父親は言った。「関心を持っておくべきだったな。」

「持っていました。」と、ジャックは肩をすくめた。

ここで、僕は少しカチンときた。ポートンがなぜジャックをこんな話に仕向けたのか分からない。チェッカーゲームで慎重という意味だろうか。

僕は言った。「僕はただ、少しは役に立つ言い方で、自分に分からないことがあると言おうとしているだけだよ。神秘にむりやり理論をあてはめて馬鹿げたことにするつもりはない。ただ神秘のことを語る人はよくそうしているがね。」(Gilead 172-173)

「変わるとも、何か他の要因が関わればね。たとえば、酒だ。行為は変わる。だからと言って、本質が変わったと言えるかどうかは僕には分からないな。」

ジャックはほほ笑んだ。「聖職者にしては、あなたはかなり慎重な方ですね。」

ポートンは言った。「30年前に彼に会うべきだったな。」

「会いました。」

「じゃあ、関心を持っておくべきだったな。」

「持っていました。」

エイムズが立腹してきたのは明らかだった。彼は言った。「自分に分からないことがあることは事実だが、それについて謝るつもりはない。分からないことがないと思っているとしたら僕は馬鹿だ。それに、神秘を無意味なものにするつもりはない。ただ神秘を語ろうとすると必ずそうになってしまうがね。必ずね。すると神秘自体が無意味だと思えてくる。こういう会話は役に立たないどころかもっとずっと悪いよ。僕の意見では。」(Home 226)

この場面を比較してまず注目されるのは、ジャックとポートンのせりふは完全に同じなのに、エイムズのせりふだけが異なっていることだ。エイムズの詭弁的な返答の要点が、人間の本质は変えられないということであるのは

同じだ。だが、*Gilead* 中の「判断しにくい」という表現は、*Home* の「僕には分からない」という表現よりも個人的主張の度合いが弱く、一般論の借用の体裁を持っている。自分の発言の一般化を志向するエイムズの語りの傾向は、*Home* でジャックのアルコール依存を含意する「酒」が単独で取り上げられているのに対し、*Gilead* では「個人的に影響するようなこと」を付け加えて矛先をジャックからそらしていることにも表れている。エイムズの報告では、ジャックに対する批判の調子が一般論の陰に隠されている。

しかしジャックは、エイムズが本心では人が変わる可能性を否定していることを見抜く。そして、エイムズが本心を隠蔽しようとする態度を「慎重」という言葉で表す。ジャックに本心を見透かされていることを知ったエイムズの反応は怒りである。*Home* では、感情をむき出しにして激しい調子で自己弁護する。「つもりはない」「無意味」「必ず」という言葉が繰り返され、最終的にこの会話の意義そのものを否定する。ジャックに対する否定的感情が会話の間に次第に増幅した末、激しい怒りとなって爆発することになった。一方 *Gilead* のエイムズ自身による報告では、*Home* に比べると怒りの激しさが弱められている。たとえば *Home* の中で使われていた「馬鹿」だという名詞が、*Gilead* では「神秘」解釈について転用されてその形容詞形「馬鹿げた」が使われ、*Home* の同じ文脈で使われた「無意味」より否定的意味は弱い。「神秘」論議の「無意味」さを強めるために *Home* で繰り返されていた「必ず」という言葉は、*Gilead* では「よく」という控えめな表現に変わっている。*Gilead* では怒りの感情が爆発する様子が抑制的に再現されていることが分かる。ここにも、息子という将来の読み手を意識して、ジャックに対して寛容な父親像を残そうとする語り手の意図が反映されているのではないだろうか。

4 ライラが会話に参入する

予定説を巡る会話が麻痺状態に陥ったのを察して、グローリーはさりげなく会話に戻るが、決定的に流れを変えたのは、ライラである。「救いはどうなるのでしょうか。変われないなら、目的があまりないような感じします。そんなのわたしが望んだことではないです」(*Gilead* 173) と発言する。この中の「目的」が「重要性」、「ないです」が「あまりないです」(*Home* 226) となっている *Home* と比較すると、*Gilead* の言葉遣いのほうがライラの確固たる意志が感じられるのは、エイムズの衝撃の表れかもしれない。「感じします」というぎこちない日本語に訳したのは、doesn't を使うべきところで don't を使うという、ライラがよく犯す文法上の誤りを表現するためである。この英語の誤りと、ライラが「顔を赤らめた」様子は *Gilead*、*Home* 双方で報告されている。教養という点で他の人物たちに劣ることを自覚しているライラが、予定説という神学上の難問について発言するのは、「顔を赤らめ」ながらでなくてはできないことであり、エイムズ達を「驚かせる」(*Gilead* 173) 大事件である。だからこそ彼女が言った「救い」という言葉が大きな意義を持って浮上する。

「救い」について問題提起したライラに対して、再び *Gilead* で報告されない場面が *Home* に出てくる。ジャックは表情を緩めて、「テントミーティング」(226) の話をする。アメリカでは、教義解釈よりも個人の罪の意識と救いに焦点を当て、野外のテントで熱狂的な伝道集会を行う、キリスト教史上「大覚醒」と呼ばれる動きがあった。このような布教のやり方は高等教育を受ける機会のなかった人たちや南部の黒人たちの間で熱狂的に歓迎されたと言われている（『アメリカ・キリスト教史』45-55）。知識階級に属するジャックは「興味津津の観察者として」ではあるが参加したことがあると話す。ライラもテントミーティングの様子を知っており、二人の共通の思い出話として語られる。ライラはこの時も「決して目を上げずに」(227) うつむいたまま会話を続けるが、ジャックを相手に冗談を交えて笑いながら話をしており、二人の共感が高まっていった様子が報告されている。

「いい点を指摘しましたね」(*Gilead* 173, *Home* 227) というライラに対するボートンのせりふで、*Gilead* と *Home* は物語の進行が一致する。*Gilead* では、予定説と救いの問題に結論は出ないとボートンに指摘されたジャックが、ライラに「微笑みかけた」(173) が、ライラは目を上げなかったことが観察される。ジャックはエイムズとボートンに向

かって、「あなた方が、ただ興味津津の観察者としてテントミーティングに参加したことは知っています」(174) と言ったと書かれている。「興味津津の観察者」とは *Home* ではジャックだった。語り手エイムズは、ライラとジャックのテントミーティングを巡る共感的場面を完全に省略したが、今度はテントミーティングに参加したのは自分とポートンだとし、ライラとの共通性がジャックではなく自分にあるとするのである。続いてやや唐突な形で話を切り上げようとするジャックに対する「私は興味があります」(174) というライラの発言に応答するのはポートンである。そのポートンに向かって、ジャックは退席を申し出る。次の「だめ、ここにいて」(174) というライラのせりふはジャックに向かって発せられてはいるものの、必要な情報を最小限伝えるだけの命令調で言われており、「そしてジャックはそうした」(174) という文章もジャックの行為の最小限の報告だ。「居心地の悪い沈黙」(174) のあと、口を開いたのはエイムズであり、「ただ会話をつなぐためだけに」(174)、神学者の名前を持ち出す。するとライラは「人は変われます。なんでも変わることができます」と言うが、ジャックを「見ないで」(174) 言ったことがわざわざ付け足されている。*Gilead* では、ライラは終始うつむいており、一度もジャックと視線を合わせない。ジャックへの発言をしても視線や言葉使いに語りかけの要素が皆無で、独り言のようである。エイムズの報告では、ジャックとライラは単なる同席者であり、二人の間に共感的な雰囲気生まれた気配はない。

Home では、「エイムズ夫人はいい点を指摘しました」(227) というポートンのせりふのあと、ほとんど忠実にグローリーの視点を採用してきた語り手が、「全知の視点へと転換している」(Kriner) ことをまず指摘しておきたい。全知の視点とは、特定の人物の視点を離れ登場人物の行為と心理を自在に再現できる全能性を有する視点である。語り手はポートンについて「エイムズの悲哀を感じた。これは、彼の妻がこれまで生きてきた、そして彼なしでこれから生きる、彼女にしか知ることのできない生活をあれこれ思い浮かべるときにしばしば感じることであった」(227) と書き、ポートンの内面を暴いてみせる。次に、予定説と救いの問題には結論がないとポートンに説かれたジャックは、*Gilead* ではライラに微笑みかけたとされているが、*Home* では「グローリーの方へ目を上げた」(227) のであり、ライラを見たかどうかの報告はない。ジャックの「この話はもうやめましょう」(227) との提案に対して、すぐにライラが「私は興味があります」(227) と答えている。この時のライラはまだ「決して目を上げずに」(227) いる。ライラの発言を受けて「ジャックはライラに微笑みかけて」(227) 丁寧に礼を言うものの、グローリーの手伝いという口実で席を立とうとする。ジャックを引きとめる「少しここにいてください」(227) というライラの言葉は、*Gilead* の「だめ、ここにいて」に比べると丁寧な語りかけの表現である。ジャックはもちろんのこと、居合わせた全員がライラに注目する中、ライラは「彼の方に目を上げて」(227) 再び発言する。ここでついに、ライラはジャックに自分の方から視線を合わせる。語り手が全知の視点を駆使してジャックとライラの視線を念入りに報告してきたのは、視線の一致の瞬間を際立たせる準備だったのである。ジャックを見ながら言った「人は変われます。なんでも変わることができます」(227) という言葉は、ジャックを見ずに言った *Gilead* の同じ言葉よりも、ジャックに対して説得力を持つ。罪深い人間は救われるのか、変われるのかというジャックの問いかけに、神学の専門家である牧師たち二人は答えることができず、会話は袋小路に入り、エイムズは怒っていた。そんな状況の中でライラは「勇気を振り絞った様子で」(227) 短い、率直な言葉で、ジャックと目を合わせジャックに向かって答えを提供したのである。またこの答えは、人が変われると決して断言しないエイムズにとっては明白な反論である。これを聞いたエイムズについて *Home* の語り手は「エイムズは眼鏡をはずし目をこすった。彼は、自分の、自分にとってこんなにも多くの点で、こんなにも未知のこの妻にある種の驚きを感じた。これまで知らなかった、彼女が若く孤独だった頃のこと、魂について考えていることを垣間見たように感じて、突然心を動かされているのかもしれない」(228) と書く。ライラは、今や単に無教養で口下手な女性ではない。エイムズが知り得ない事柄を知っている人物として、畏怖の対象となる。ジャックの問いかけに対して確固たる答えを出すことができたのが神学の素養のないライラだったことに、エイムズは自分の限界を思い知らされたことだろう。

最後に、「人は変われます」というライラの決定的な発言へのジャックの返答を比較してみよう。

彼は言った。「ありがとう。それこそまさに僕が知りたかったことです。」

こうして、会話は終わった。僕たちは夕食のために家に帰った。(Gilead 175)

ジャックは、とても穏やかに言った。「本当に、エイムズ夫人、ありがとうございます。それこそまさに僕が知りたかったことです。」(Home 228)

ジャックのライラに対する感謝の表現は、Gilead よりも Home の方がはるかに丁寧である。Gilead のそっけなさは、ライラが「そこにいる」とジャックに言った時のそっけなさと同様である。Gilead 中のジャックとライラには一対一の親密な関係が全く見られない。一方 Home でのジャックの返答には、「とても優しい調子で」に現れているように、「まさに知りたかったこと」を言ってくれたライラに対する心からの敬意が込められている。この時ライラとジャックは視線を合わせており、二人の間には特別な共感が生まれているはずである。予定説に関する一連の会話は、ジャックがエイムズに意見を求めることから始まり、ライラが答えることで終わったが、ライラとジャックの親密性が Gilead では弱く、Home では強く報告されていることは明らかである。

おわりに

以上のように、同じ場面について二つの小説を詳細に比較してみると、せりふの再現や仕草の報告の点で相違があることが分かった。マリリン・ロビンソンがエイムズの語りの特徴について語ったインタビューがある。「たとえば、夕食会です。エイムズもそこにいましたが、Gilead の中では一言も触れていません。自分にとって痛みを伴う状況や、不運な思い出を強めると思えるような状況を報告しようとはしないのは、エイムズの人物像にぴったり一致しています (The Paris Review)。」エイムズが完全に省略した夕食会は、主要な登場人物たちがそろそろ最初の場面である。ここではジャックとライラの出会いをエイムズが不愉快に感じている様子が描かれている。彼らの出会いがエイムズにとって「痛みを伴う状況」だったため、報告を避けたのだ。本論考で取り上げた場面についても、Gilead では一貫してジャックとライラのやり取りのぎこちなさが報告され、親密さを感じさせる要素が欠けていた。視線の交換に象徴されるような、ジャックとライラの間にも生まれるわずかな親しささえも、エイムズにとってはことごとく「痛みを伴う状況」と感じられたからだろう。

敵を愛せ、ねたんではならない、と説教する牧師であっても、いかにその実践において不完全であるかは、Gilead のなかでエイムズ自身が「隣人の家を欲してはならない、という教えに、うまく従えたためしはない」(153) と書いている。「ねたみの罪」(152) が、ライラとジャックの関係の不正確な報告という形で Gilead という息子への手紙の語りにも表れていることが、Home との比較で明らかになった。エイムズは、友人ポートンをねたみ、ジャックを憎み、ジャックとライラの親しさを受け入れられず、公平な記述ができなくなっている。そういった負の感情を理論的言説の中に隠蔽して、息子に抱いてほしい父親像を演出しようとする語りにも偏りがちにもなる。二つの作品を合わせて読むと、エイムズという人物が人間の内的な不完全さと、語り手としての不完全さの両方を体現していることが分かる。マリリン・ロビンソンは「我々が経験する現実とは任意のものだ」(Absence of Mind 122) と言う。人間とは、どんなに知識を蓄積し理論を駆使したところで、任意の仕方で、恣意的にしか現実をとらえることは出来ず、現実の認識はいつまでたっても不完全なのである。Gilead で報告される現実、エイムズによって任意に選ばれたものにすぎない、ということが Home によって明らかになった。そして、「任意」を左右するものが、憎しみや嫉妬といった感情であることも、エイムズという人物の再構築を通して示されたのである。

引用文献

Appleyard, Bryan. "Marilynne Robnson: world's best writer of prose." *The Times*. 21 September 2008.

Kriner, Tiffany Eberle. "Rumination Leads to Revelation: Marilynne Robinson's *Home*." *The Gospel and Culture Project*. April 6, 2009.

Robinson, Marilynne. *Absence of Mind*. New Haven: Yale University Press, 2010.

_____. *The Death of Adam*. New York: Picador, 2005.

_____. *Gilead*. London: Virago Press, 2005.

_____. *Home*. New York: Picador, 2008.

_____. "Marilynne Robinson: The Art of Fiction No. 198." *The Paris Review*. Fall 2008.

Scott, A. O. "Return of the Prodigal Son." *The New York Times*. 21 September 2008.

森本あんり、『アメリカ・キリスト教史』、新教出版社、2009年。